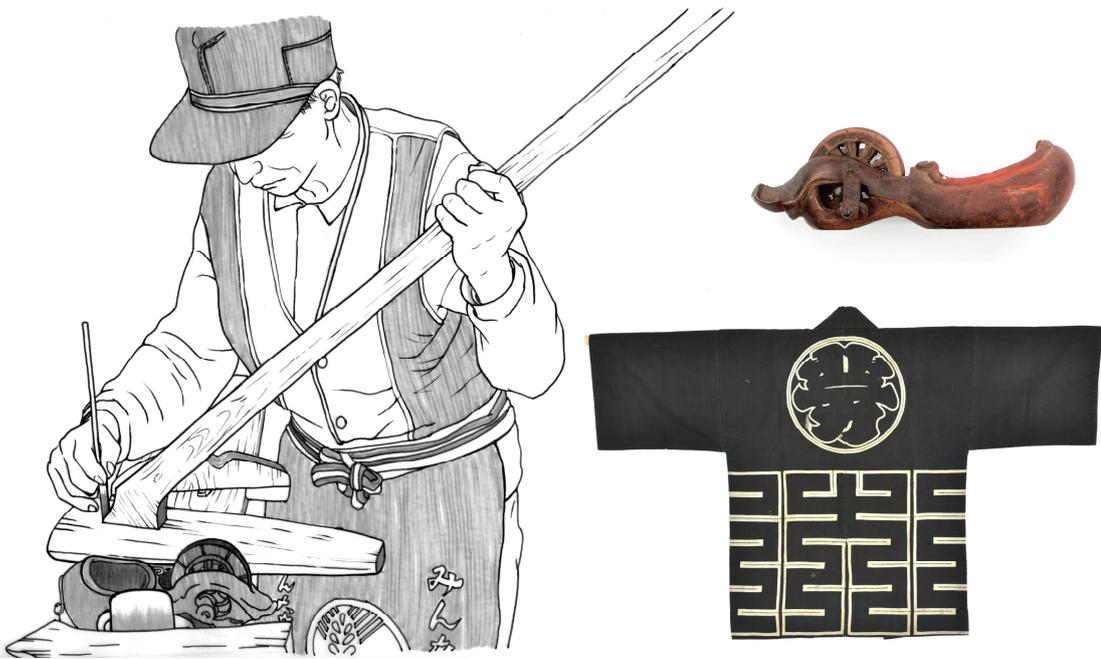


職人は語る

桶川市歴史民俗資料館 企画展示



展示期間：令和3年12月19日(日)～翌2月6日(日)

私たちの暮らしは、さまざまな道具によって支えられ、これらの道具は祖先から受け継がれ生活の中で生み出されてきました。

日々の暮らしの中で使われる道具は簡素で無駄のない美しさをもっています。このことは、長い時間の中で洗練されてきた「用い的美」ともいえるべきもので、現代の私たちにも感動を与えます。今回の展示では、暮らしを支えた道具を、職人さんたちからの聞き取り調査の記録をもとに紹介します。

町の職人

中山道桶川宿の伝統をもつ桶川の町は、商人とともに職人の暮らす場でもありました。

大工職

展示する資料は、五代にわたって町の工匠として生きた島村家の大工道具です。大工職は、道具を何よりも大切に、道具箱に収められている道具は職人としての家の歴史が込められています。目立てを繰り返しながら磨り減った両刃鋸は確かな技の伝承を物語っています。



磨り減った両刃鋸



建具職

小川家は二代にわたって建具工房を構えてきました。当代の小川和雄さんは昭和8年生まれ、父親に弟子入りして仕事をおぼえました。

建具には細工のしやすい杉や檜を使います。鉋は仕事に合わせて使い、障子の溝をとる際鉋（きわがんな）は右刃と左刃があります。



際鉋 右刃・左刃



職人の親方は、大きな店の出入り職人となり、仕事を請け負っていました。職人の絆纏は、年の暮れに職人の出入り先からお仕着せとして与えられたものなのです。

昭和になると仕事着としての絆纏は洋服に変わりましたが、職人の晴れ着として絆纏は大切にされていました。親方たちはこれを着て年始回りをし、町の旦那たちとの関わりを深めていたのです。

太子講

桶川宿の歴史を伝える浄土宗清水山浄念寺の境内には太子堂があり、聖徳太子像がまつられています。町の職人たちは聖徳太子の命日に太子講を開いて敬ってきました。その伝統は、現在も建設埼玉桶川支部と同西支部の人びとに引き継がれています。

かつての太子講は、桶川職工組合が行い、1月22日に聖徳太子の掛軸をかけて線香をあげ、職人相互の親睦と交流の場がもたらされていました。



太子講の掛け軸

村の職人

村にも、農家が使う農具や暮らしの道具を作る職人が数多く暮らしていました。

桶屋

川田谷の天沼家は、大正2年生まれの日沼幸明さんが親戚の大木家とともに、桶屋職人をしていました。桶屋の仕事は、農閑期の冬場に家で仕事をしていました。桶や柄杓などを作っていました。昭和30年代にアルマイトなどの普及により廃業したそうです。

籠屋

身近に得ることができる竹は、籠職人の手によって美しい道具となりました。桶川市域は県内でも多く職人が暮らしていました。

籠屋は、竹を農閑期となる冬に伐り出し、麦作や養蚕、お茶づくりの用具を作っていました。竹の器は時を経ても美しさを保っています。

棒屋

棒屋とは農具の柄を作ることを主に行う職人です。川田谷の島田常吉さんは大正4年生まれ、川越で修行して棒屋に加えて車大工の技も習得したそうです。島田さんは、農具は使う人や耕す土に合わせて柄の材質や柄の付け方を変えと言っていました。

川と職人

桶川市域は荒川と元荒川にそれぞれ接しています。川の恵みを受けて暮らす職人の営みを見出すことができます。

瓦屋

市内東部の五丁台にはかつて6軒の瓦屋が仕事をしていました。その草分けである栗原本店は、明治時代に元荒川に沿う笠原（鴻巣市）の大瓦屋から分かれ、良い瓦土があるこの地にやってきました。だるま窯で焼く瓦作りは、昭和40年代から衰え、同60年には窯を閉じています。

船大工（特別出品 協力：上尾市教育委員会）

上尾市平方は荒川の河岸として栄えたところです。船大工であった新井家は「船製造仕様扣簿」という造船の記録と、船大工用具を伝えていました。新井家が作った最大の船は、明治37年に川田谷村の太郎右衛門河岸の船頭が頼んだ船でした。

紺屋

市内東部の篠津地区は元荒川と赤堀川に沿う水に恵まれたところです。滝沢家は、かつて藍染めを行う紺屋を営んでいました。

滝沢家の紺屋仕事では、藍をたてて染められるようにしておくと、村の女性たちが集まり、木綿を染めていったとのこと。

芸に生きる人びと

暮らしを支える道具を作る職人だけではなく、暮らしを彩り、人びとに楽しみをもたらす職をもつ人たちも、かつては活躍していました。

神楽師

神楽師は太夫を中心に一座を構え、氏子に代わって、神楽を演じていました。和久津伊作氏は、製茶業を営みながら神楽を習い覚え、地元下日谷の仲間を集めて「和久津社中」の太夫元となりました。和久津家は、昭和初期から40年代まで、神楽師を続けていました。

花火師

川田谷地区の北端にあたる八幡原は、花火師の村として知られていました。かつては、作物がよく実った年の秋に地元で花火を打ち上げ、明治時代には桶川駅開通、埼玉師範学校開校の祝賀花火を八幡原の花火師が行ったとも伝えられています。

